

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520118

研究課題名（和文） 大村西崖の研究

研究課題名（英文） Study of Omura Seigai

研究代表者

塩谷 純（SHIOYA JUN）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部・文化形成研究室長

研究者番号：90311159

研究成果の概要（和文）：明治中期に美術批評家として活躍し、その後半生には東京美術学校教授として東洋美術史学の発展に大きく貢献した大村西崖（1868～1927 年）についての研究を行った。

研究成果の概要（英文）：We surveyed OMURA Seigai (1868–1927), who was active as an art critic during the middle of the Meiji Period and later in his life contributed substantially to the development of Oriental art history as a professor at the Tokyo Fine Art School.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：大村西崖

## 1. 研究開始当初の背景

大村西崖については、同じく美術批評や東洋美術史に大きな足跡を残しながらもその見解や手法を違えた岡倉天心と対峙する存在と目されているものの、全集等の完備した天心に比べれば、その研究は緒に就いたばかりといえよう。今回の研究分担者である吉田千鶴子は、すでに「大村西崖の美術批評」（『東京芸術大学美術学部紀要』26）および「大村西崖と中国」（『東京芸術大学美術学部紀要』

29）で、西崖の著作を洗い出して本研究の礎を築いている。

西崖は評論と研究の両分野にまたがり活動を行い、また日本のみならず中国美術をもフィールドとしただけに、日本近代美術史・仏教美術史・中国美術史等の立場からさまざまな視点から関心が寄せられてきた。それらを整理すれば、以下の三点になる。

## （1）美術批評の視点

上記の吉田論文の他、岡倉天心ら日本美術

院の理想主義に対し自然主義を標榜した結城素明や平福百穂らの无声会や、明治中期の“彫塑”をめぐる研究の一環として庄司淳一氏が「美術と自然—大村西崖の「自然」思想」（『日本の美学』10）、「大村西崖と彫塑会・无声会」（『宮城県美術館研究紀要』3）を発表している。

### （2）東洋美術史学の視点

西崖がその後半生に編纂・著述を行った『東洋美術大観』（明治41年～大正7年刊）や『支那美術史彫塑篇』（大正4年刊）等は、今日でも優れて実証的な研究書として通用している。中国仏教美術研究の立場から岡田健氏が「龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖」（東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去—日本の美術史学100年』）で、岡倉天心と対比させながら西崖の研究手法を焙り出している。

### （3）日中文化交流の視点

中国美術史研究の深化に伴い西崖は文人画への関心を高め、陳師曾ら中国の美術家と交流、その文人画論は中国でも高く評価された。上記の吉田論文の他、陸偉榮氏が「陳師曾と大村西崖—近代文人画をめぐる」（同『中国の近代美術と日本—20世紀日中関係の一断面』）で研究を進めている。

## 2. 研究の目的

本研究の大きな目標として、大村西崖遺族より東京芸術大学美術学部教育資料編纂室が譲り受けた資料の整理・目録化があった。これは西崖の蔵書・草稿・日記・書簡・写真といった段ボール箱40箱分の一次資料の類で、日記についてはその一部が研究分担者の吉田により紹介されている（「西崖日記」『近代画説』8）ものの、あとは全く未整理の状態にあった。これを三年かけて整理・目録化し、情報を研究者間で共有できるようにし、

その上でこれらの一次資料に基づき、西崖研究の更なる進展を図るのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、大村西崖遺族より東京芸術大学美術学部教育資料編纂室が譲り受けた資料の整理・目録化を軸として、これを基に美術批評や東洋美術史学、日中文化交流等といった多角的な視点から西崖についての考察・分析を行う。

### （1）大村西崖資料の整理・目録化

大村西崖資料の目録作成を進める。基本的には資料名の入力だが、必要に応じて資料全文のテキスト化、写真資料の画像データ化を行う。

### （2）大村西崖についての考察・分析

#### ① 大村西崖の美術批評（担当：塩谷・吉田）

明治30年代前半における西崖の精力的な批評活動について、上記資料や当時の新聞雑誌に掲載されたテキストを読み込みながら、当時の絵画や彫刻の動向とあわせ考察する。

#### ② 東洋美術史学者としての大村西崖（担当：大西・皿井）

今日でも学術的に通用する『支那美術史彫塑篇』（大正4年刊）をはじめ、東洋美術史研究において多大な足跡を残した西崖の業績について、近年の学史研究の進展を踏まえつつ、主に古美術研究者の立場から考察する。

#### ③ 大村西崖と中国（担当：吉田）

西崖が晩年に果たした日中文化交流上の功績について、当時の日中の美術界の動きと対照させながら検証する。

## 4. 研究成果

本研究の成果をまとめたものとして

2012年3月に、目録篇・資料篇・論文篇からなる研究成果報告書（A4版 全300頁）を刊行した。

目録篇では研究分担者の吉田千鶴子・大西純子の監修により、これら全てを目録化し、適宜覚え書きとして吉田による略解説ないし翻刻を付している。また寄贈資料の目録に加え、吉田が蒐集した西崖の美術批評（新聞掲載）の目録も付録として収載した。

寄贈資料のうち西崖に宛てられた中国人書簡については、報告書の資料篇でその翻刻と書き下し文を収載している。陳師曾や汪亜塵といった中国の文化人との交友の証である本資料は、西崖研究のみならず日中美術交流史の研究に益するものとなるはずである。翻刻と書き下しは、研究協力者である村田隆志氏（大阪国際大学・国際コミュニケーション学部・講師）と尾川明德氏（安田女子大学。文学部・助教）が行った。

論文篇には研究代表者の塩谷純と研究分担者の大西による論考二本を載せている。いずれも平成23年10月18日に東京文化財研究所で行った企画情報部研究会での発表に基づく内容で、要旨は以下の通りである。

○塩谷純「大村西崖と朦朧体」

明治30年代前半の大村西崖は、日本美術院の一派とは対立する美術批評家として知られる。橋本雅邦周辺の画家による観念的な傾向を、自ら主宰する美術雑誌『美術評論』や『読売新聞』『東京日日新聞』紙上で痛烈に批判し、とくに菱田春草らの編み出した新たな表現に「朦朧体」の名を与え、揶揄したのはまさしく西崖であった。しかし朦朧体以前の西崖の批評を読むと、日本画の線や筆法に対する忌避感を露わにし、あたかも朦朧体に連なるかのような論調であることは注目される。本論考では、朦朧体の語義に関する先行研究もふまえながら、

明治30年代前半における西崖の言説と春草らの試みを近代日本画の流れの中であらためて捉え直してみた。

○大西純子「大村西崖撰『支那美術史雕塑篇』について（資料紹介）」

大正4年6月に刊行された大村西崖撰『支那美術史雕塑篇』は、中国の雕塑全体を網羅した最初の資料集である。その資料的な価値は、当時のみならず今日なお多くの中国雕塑史の研究者がこの書を参考にし、あるいは引用しているところからもわかるように高い。「大村西崖資料」中に残る、本人の校訂本、手記など、西崖が行った実際の調査および本書編纂の経過を窺うことができる資料を紹介する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 塩谷純、川端玉章の研究(二)、美術研究、査読無、399号、2010、37-45
- ② 塩谷純、川端玉章の研究(三)、美術研究、査読無、401号、2010、29-49
- ③ 吉田千鶴子、日中美術交流最盛期の様相、アジア遊学、査読無、146号、32-40

〔図書〕（計1件）

- ① 吉田千鶴子・大西純子、東京藝術大学出版会、六角紫水の古社寺調査日記、2009、332

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩谷 純 (SHIOYA JUN)

東京文化財研究所・企画情報部・文化形成研究室長

研究者番号：90311159

(2) 研究分担者

吉田 千鶴子 (YOSHIDA CHIZUKO)

東京芸術大学・美術学部・非常勤講師

研究者番号：30401483

大西 純子 (ONISHI JUNKO)

東京芸術大学・美術学部・非常勤講師

研究者番号：40401484

皿井 舞 (SARAI MAI)

東京文化財研究所・企画情報部・研究員

研究者番号：80392546